

人間生物世界 (human-dependent bioworld)

岩田好宏 (学習論)

IWATA, Yoshihiro (Theory of Learning)

人間生物世界とは

それ自体の理に則するほか、農作など人間によるはたらきかけがないと存在できない生物世界を「人間生物世界 (human-dependent bioworld)」とよぶことにする。また人間生物世界は、歴史的にみればそれ以前にあった、次に述べる原生物世界、野生生物世界を破壊して成立したものとみることができるので、人間生物世界は、人間の生物世界とのかかわりを知る上で重要な手がかりとなると考えられる。

これに対して人間の影響を受けていない生物世界を「原生物世界 (proto bioworld)」ということにし、人間の影響を受けながらもそれが軽微であることによって、自体の理に則して存続する生物世界を「野生生物世界 (wild bioworld)」ということにする。この二つの生物世界を「自然生物世界 (natural bioworld)」とする。ただし原生物世界は、地球表層においては、現在存在してないと考えられる。

農村の休耕、放置された農作地のあとでは、作物とその雑草からなる人間植物世界がなくなり、関東平野部を例にすると、メヒシバの、つづいてヒメジョオンの、さらにススキの原に変化し、そののち低木林になる。このような変化は、地域によって植物の種類にちがいがあがるが、環境変動の激しいところでなければ、一年生草原、越年生草原、多年生草原、低木林、陽樹高木林、陰樹高木林という順に進む。またこのような植物世界の変化にともなって、そこに生息する動物など他の生物の種類も次々に変わってゆく。ところが農作地においては、生態学で「遷移」とよんでいるこのような変化は、それに対する人為的抑止を間断的にくりかえし受けて、生物世界はその遷移の初期段階にとどまっている。

こうした人間生物世界の状況は、環境変動の激しい海浜砂丘や川辺域などにみられるのと同様のこととみることができる。川辺域は、大雨により川の水位が上昇すると、水没する場所では遷移が止まり、植物が流失したり土砂に埋没したりして無植物地帯となる。水位が下降して陸地化すると遷移が始まる。このことから人間生物世界は、生物にとっては

環境変動の激しいところとみることができる。このような遷移とその人為的抑止のくりかえしは、都市の芝地、花壇、樹林、道端の植物世界にもあり、農村のかつての里山の林、萱原（かやはら）でもある。放置後の人間生物世界の遷移にともなう変化は、人間の立場からみれば「荒廃」というが、それ自体は、人間生物世界から野生生物世界へ向けての変化過程にあるとみることができる。

人間生物世界・野生生物世界にみられる生物

人間生物世界、野生生物世界それぞれに生息する動植物の例をあげると、次の表のようになる。

表 野生世界 (野生生物)・人間世界 (馴化生物・培育生物)

存在する生物世界		生息している生物	動物	植物	人間による給餌・保護
野生生物世界	アフリカのサバンナなど	野生生物	アフリカのサバンナの 아프리카ゾウ	白神山地の天然ブナ林	ない
人間生物世界	都市の生物世界、農村・里山など	馴化生物	ドブネズミ、スズメ	オオバコ	ある
		培育生物	ブタ、動物園のゾウ・ライオンなど	イネ	

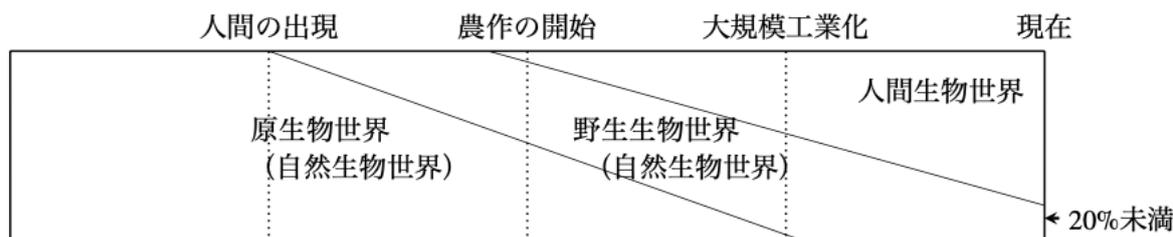
野生生物世界に生息する動植物は、たとえばアフリカのサバンナにみられるアフリカゾウや白神山地奥地の天然ブナ林を形成している諸植物である。人間生物世界に生息する生物は、それに対する人間のはたらきかけのちがいによって二つに分けられる。農作地のイネやダイコン、動物園のライオン・ゾウのように人間によって強制移住させられ、人間の給餌や保護を受けて飼育されている動物、栽培されている植物、培養されている菌類、細菌類をまとめたものを「培育生物」ということにする。これに対してドブネズミやスズメ、道端などのオオバコや畑地雑草のスベリヒユ、里山林のオミナエシなどのように、それ自体で人間生物世界に移住し、人間の給餌、保護を受けずに生存している生物を「馴化生物」ということにする。なお、植物については上の表とは異なり、馴化植物を人里植

物と雑草に分ける考え方があり、植物図鑑類の中には、馴化植物を野生植物にふくめているものがある。

人間生物世界の歴史

生物世界は、まず人間出現以前の原生物世界から始まり、人間が出現してからその生活圏が原生物世界から野生生物世界にかわったと思われる。農作がうまれる少し前から自然生物世界（原生物世界と野生生物世界）の一部が人間生物世界になり、それは農作の開始と普及で拡大した。そしてその分だけ自然生物世界が失われたとみることができる。人間生物世界を形成し、それとの関係で展開されるようになった農作生活は、この点だけでなくもう一つ、人間の生物世界との関係が狩猟採集生活とは大きくちがう。狩猟採集は、それによって対象である生物の個体数が減少しても、ある期間他所へ移動して人間がはたらかかけをやめて放置すれば、繁殖によって回復し存続する。放置は、狩猟採集では必須の手段であるが、農作では、放置しつづければそれ自体が成り立たなくなる。

生活の大規模工業化の進展の中で現在の日本列島表層では、次の図のように原生物世界がなくなり人間生物世界は4分の3をこえたと考えられる⁽¹⁾。



日本列島における現生物世界・野生生物世界・人間生物世界の推移の概念図

人間生物世界と人間

馴化生物となる生物それ自体は、自然生物世界の中で生物世界の分化・多様化の一環として自然生物として出現した。その出現時にかかわった自然を「原環境」ということができる。そのような生物が新たに出現した人間生物世界の中で生存するのは、人間生物世界が環境として原環境と似ており、生存が可能であるからと考えられる。この場合、新たな生物世界が生物の環境として原環境のかわりになっているので、これを「代替環境」ということができる。馴化生物は、ほとんどが他の地域から移動してきた生物であり、人間生物世界は馴化生物にとっては代替環境ということができる。馴化生物の「生物—代替環境」関係は、馴化生物になる前の「生物—原環境」関係と似ているが同一ではない。した

がって馴化生物それ自体が、原環境での変化とはちがった変化をする可能性がある。さらには生活様式の異なる個体群の出現も否定できない。

生物世界は、今やその大部分が人間生物世界になり、その分化と多様化は、1万余年前まで続いてきた38億年の生物世界の分化と多様化とはちがったものとなり、生物世界のこれからの歴史の方向が大きく変わる可能性が強い。ここに、人間生物世界出現の特異性があるとみることができる。

注

(1) 「環境省による植生の自然度に関する調査の結果を参考にした。

参考文献

岩田好宏 (1987) 「木とはなにか」『理科教室』vo.30、no.4：28-33.

岩田好宏 (2008) 「野生生物保全と里山」, 『野生生物保全事典』認定NPO法人野生生物保全論研究会編, 緑風出版, : pp.107-119.

岩田好宏 (2013) 『環境教育とは何か』, 緑風出版.

岩田好宏 (2017) 「野生生物とその保護」, 『生物多様性保全と持続可能な消費・生産、認定』NPO法人野生生物保全論研究会, : pp.71-83.

岩田好宏 (2022) 「野生世界と人間世界—農作の意味を問う—」, 総合人間学研究 (オンラインジャーナル版), 16 : 85-89.

岩田好宏 (2022) 「総合人間学研究に必要な統一理論確立の第1歩として」, 総合人間学 (オンラインジャーナル版), 16 : 126-132.

沼田眞編 (1977) 『群落の遷移とその機構—植物生態学講座4』, 朝倉書店.

沼田眞 (1987) 『植物生態学論考』, 東海大学出版会.